

報告

札幌チャレンジド放課後等デイサービスについての一考察

ー保護者へのアンケート調査によるー

水谷 清人（札幌学院大学人文学部人間科学科 4 年生）

加納 尚明（NPO法人札幌チャレンジド理事長）

二通 諭（札幌学院大学人文学部人間科学科教授）

はじめに

札幌市内の放課後等デイサービスは、2018 年の段階で直近の札幌市立小中学校数（300）を大きく上回る 470 箇所以上に達している。

1995 年に、二通もその一員であったが、保護者や教育や福祉の実践者、研究者、医師らが「“障害をもつ子の放課後”実態調査団」を結成し、質において決して豊かとはいえない障害のある子どもたちの放課後生活の実態を明らかにした。とりわけ、7 割が自宅で過ごしていること、遊び相手として最も多いのが母親であること、この 1 週間で放課後友人と過ごした日数がゼロだったケースが 56%（中学生は 6 割超）に上っているという事実は、メディアで大きく取り上げられ、まさに衝撃をもって迎えられた。当時と現在とは隔世の感がある。

その一方、現状の放課後等デイサービスは玉石混淆ではないかと巷間囁かれている。このことについては噂のレベル、印象論のレベルに留まっており、信頼できる調査研究として明示されていない。今後、各所における発達の事実、実践の事実を掘り起こし、集約していく必要がある。

本調査はその端緒として、札幌チャレンジド放課後等デイサービス 1) に焦点を定め、利用する子どもの保護者の実感を手がかりにその意義及び課題について考察する。

なお、本調査は、水谷清人の卒業論文『放課後等デイサービスの実践展開についての一考察ー札幌チャレンジド保護者へのアンケート調査からー』（2018 年 12 月）から、札幌チャレンジド保護者へのアンケート調査の結果の部分のみ取り出し再構成したものである（2019 年 2 月～3 月）。したがって、執筆者の肩書は 2019 年 3 月当時のものである。

1. 調査の目的

放課後等デイサービスの保護者のねがいに応えうる実践、すなわち利用者のニーズに応えうる実践について、パソコンスキルの向上を柱とする学習支援に取り組む札幌チャレンジド放課後等デイサービスの事例から検討する。加えて、放課後等デイサービスの意義や課題について考察する。

2. 調査の方法と概要

- ・調査の対象は、パソコンの指導を柱とする札幌チャレンジド放課後等デイサービスを利用する中学生 14 名、高校生 34 名、他 1 名、総計 49 名の保護者である。（参考までに男女内訳を記しておく。男子 40 名、女子 9 名。）
- ・配布郵送法によるアンケート調査。アンケート用紙及び郵券貼付済みの返信用封筒を札幌チャレンジドが通所している子どもをとおして保護者に渡し、返信用封筒を札幌学院大学二通諭研究室経由

で水谷が集約、整理。

- ・アンケート調査の項目は、水谷、加納、二通、札幌チャレンジド担当職員・城後の協議（2018年9月～10月）によって設定した。
- ・調査期間として2018年11月×日から12月×日までの約1ヶ月間を設定した。
- ・配布数49に対して、回収数は33。回収率は67%であった。
- ・全体の傾向を単純集計によって把握した。

3. 保護者のねがいと放課後等デイサービス

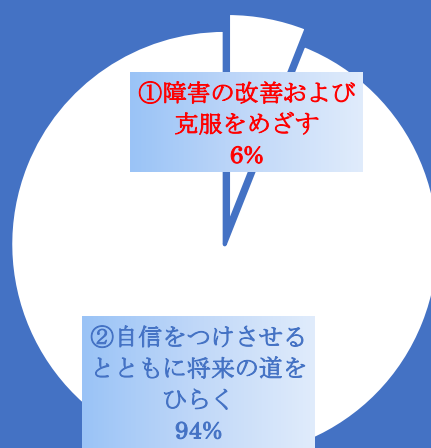
保護者が我が子を放課後等デイサービスに通わせる目的は、「学習や社会生活の阻害要因になる困難または障害の改善および克服をめざす」ことと、「可能性を引き出し、自信をつけさせるとともに将来の道をひらく」ことの2点であると考えた。さらに保護者の感情、換言すれば「親心」において、どちらがより重きをなす目的になるのか。以下に示す本アンケート調査の設問1はこのような問題関心によるものである。

設問1「お子さんを札幌チャレンジド放課後等デイサービス（以下、札幌チャレンジド）に通わせるにあたって、以下2点の期待があったのではないかと推察いたしますが、あえて選択するならどちらをより重視していましたか。」に対する回答は図1に示すとおりである。「以下2点」とは、下に示す①と②である。

①学習や社会生活の阻害要因になる困難または障害の改善および克服をめざす。

②可能性を引き出し、自信をつけさせるとともに将来の道をひらく。

保護者が札幌チャレンジド放課後等デイサービス を利用する際により重視したこと



グラフ1のとおり、ほとんどの回答者が「②可能性を引き出し、自信をつけさせるとともに将来の道をひらく。」を選択した。「①学習や社会生活の阻害要因になる困難または障害の改善および克服をめざす」というねがいももちろんあるだろう。但し、あえて選択するなら、「困難」、「障害」よりも、「可能性」や「自信をつけさせる」ことに着目する保護者が多数を占めた。本調査では①を選択した保護者がたまたま少数であったが、希少な存在ということではない、ということをお断りしたい。

札幌チャレンジド運営者へのインタビューでは、札幌チャレンジドの本質的な目標は「子供たちに自信

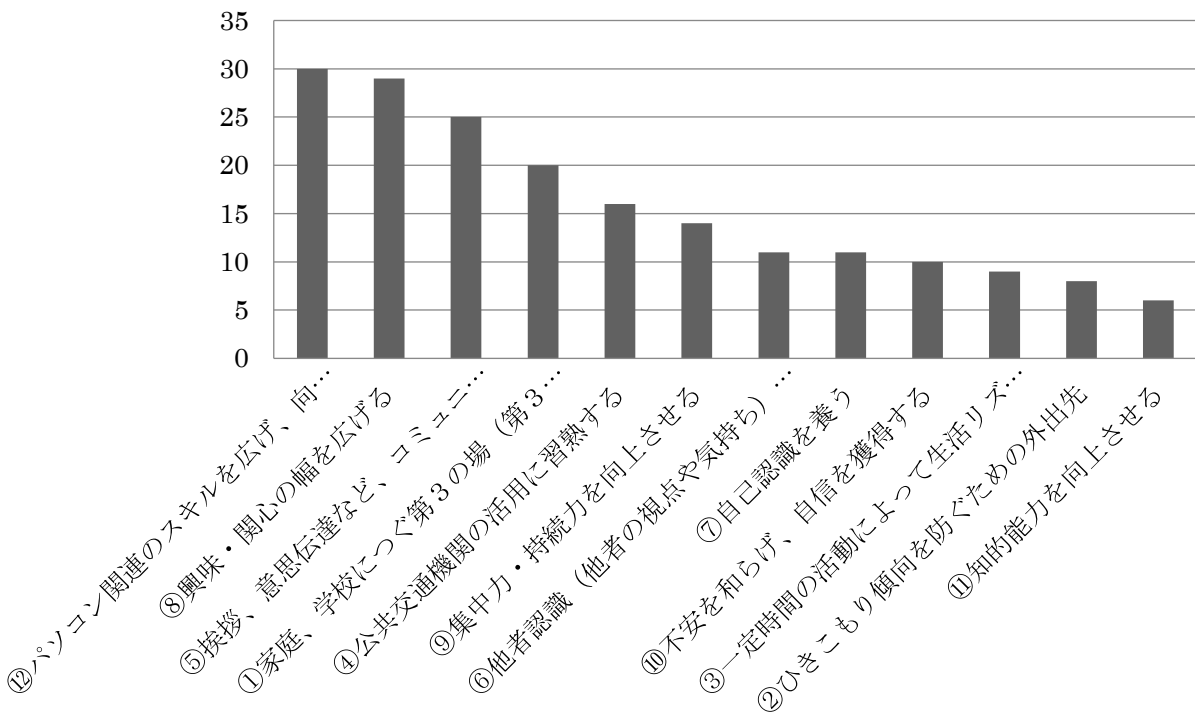
をつけてもらう」ということであった。保護者の願いと札幌チャレンジドに伏在している目標が重なり合っていることがわかった。

4. 保護者が札幌チャレンジド放課後等デイサービスに期待した機能

設問 2 では、札幌チャレンジド放課後等デイサービスが子どもにとってどのような機能があると考えたかについて聞いた。すなわち期待した機能である。選択肢は以下のとおりである。(複数回答)

- ①家庭、学校につぐ第3の場（第3の居場所）になる。
- ②ひきこもり傾向を防ぐための外出先。
- ③一定時間の活動によって生活リズムが整う。
- ④公共交通機関の活用に習熟する。
- ⑤挨拶、意思伝達など、コミュニケーション力を養う。
- ⑥他者認識（他者の視点や気持ち）を養う。
- ⑦自己認識を養う。
- ⑧興味・関心の幅を広げる。
- ⑨集中力・持続力を向上させる。
- ⑩不安を和らげ、自信を獲得する。
- ⑪知的能力を向上させる。
- ⑫パソコン関連のスキルを広げ、向上させる。
- ⑬その他（ ）

グラフ 2：保護者が札幌チャレンジド放課後等デイサービスに期待した機能



グラフ 2 のとおり、期待したであろう機能の 1 位が「⑫パソコン関連のスキルを広げ、向上させる。」で、2 位が 1 位とわずかな差で「⑧興味・関心の幅を広げる。」であった。3 位に「⑤挨拶、意思伝達など、コミュニケーション力を養う。」、4 位に「①家庭、学校につぐ第 3 の場（第 3 の居場所）になる。」が続く。

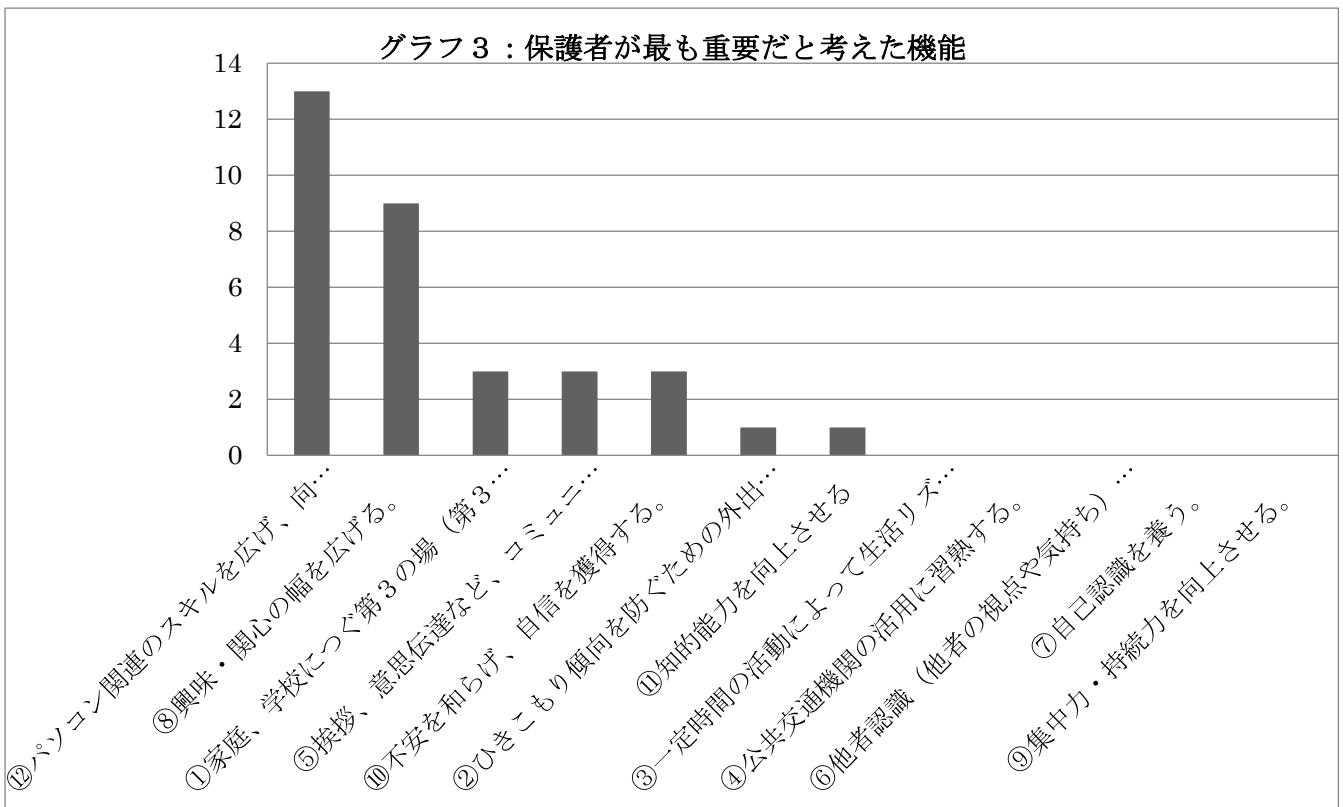
興味・関心の幅を広げることが上位にきたのは、ヨコへの発達の願いの強さともいえる。パソコン関連のスキルアップは、現代生活における必要な技能であり、タテの発達における重点的な課題の一つである。せめてこれだけはこの願いの反映ともいえる。保護者はタテへの発達もヨコへの発達も望んでいる。5 位に「④公共交通機関の活用 に 習熟する。」という社会生活における実用的な能力が入ってきていることもリアルな課題認識の反映といえよう。

5. 保護者が札幌チャレンジド放課後等デイサービスの機能で最も重要だと考えたもの

設問 3 は、設問 2 の選択肢から最も重要な機能として考えたものを一つだけ選択するというものであった。結果は、グラフ 3 のとおりである。

「⑫パソコン関連のスキルを広げ、向上させる。」が 1 位となり、保護者の多くは、札幌チャレンジドの活動内容の柱、持ち味であるパソコンスキルの向上を願っていたということが明らかになった。札幌チャレンジド放課後等デイサービスではパソコンスキルの向上を活動内容の柱にしており、保護者もこのことを前提にして我が子を通所させていることがわかる。

2 位は「⑧興味・関心の幅を広げる。」であり、ヨコへの発達の願いが強いこともわかった。3 位に、「①家庭、学校につぐ第 3 の場（第 3 の居場所）になる。」、「⑩不安を和らげ、自信を獲得する。」、「⑤挨拶、意思伝達など、コミュニケーション力を養う。」が同数で並んだ。この設問では「公共交通機関の利用」が後景に退き、「自信の獲得」が前景に出てきた。自信をもつ、ということも切実な課題だといえよう。

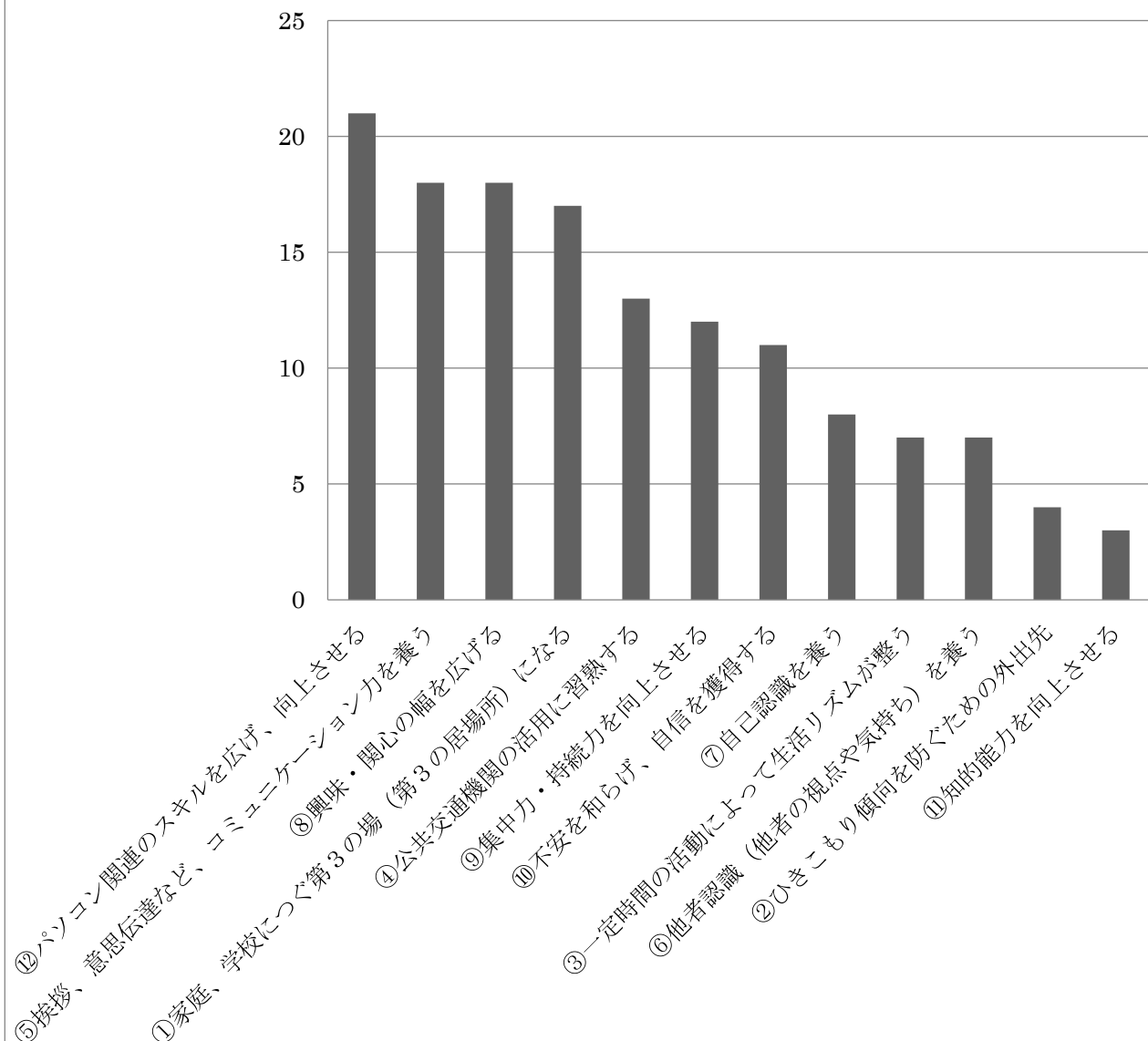


6. 保護者が札幌チャレンジ放課後等デイサービスを利用して効果として感じていること

設問4は、札幌チャレンジ放課後等デイサービスを利用して効果として感じていることを設問2の選択肢からすべて選択するというものであった。結果は、グラフ4のとおりである。(複数回答)

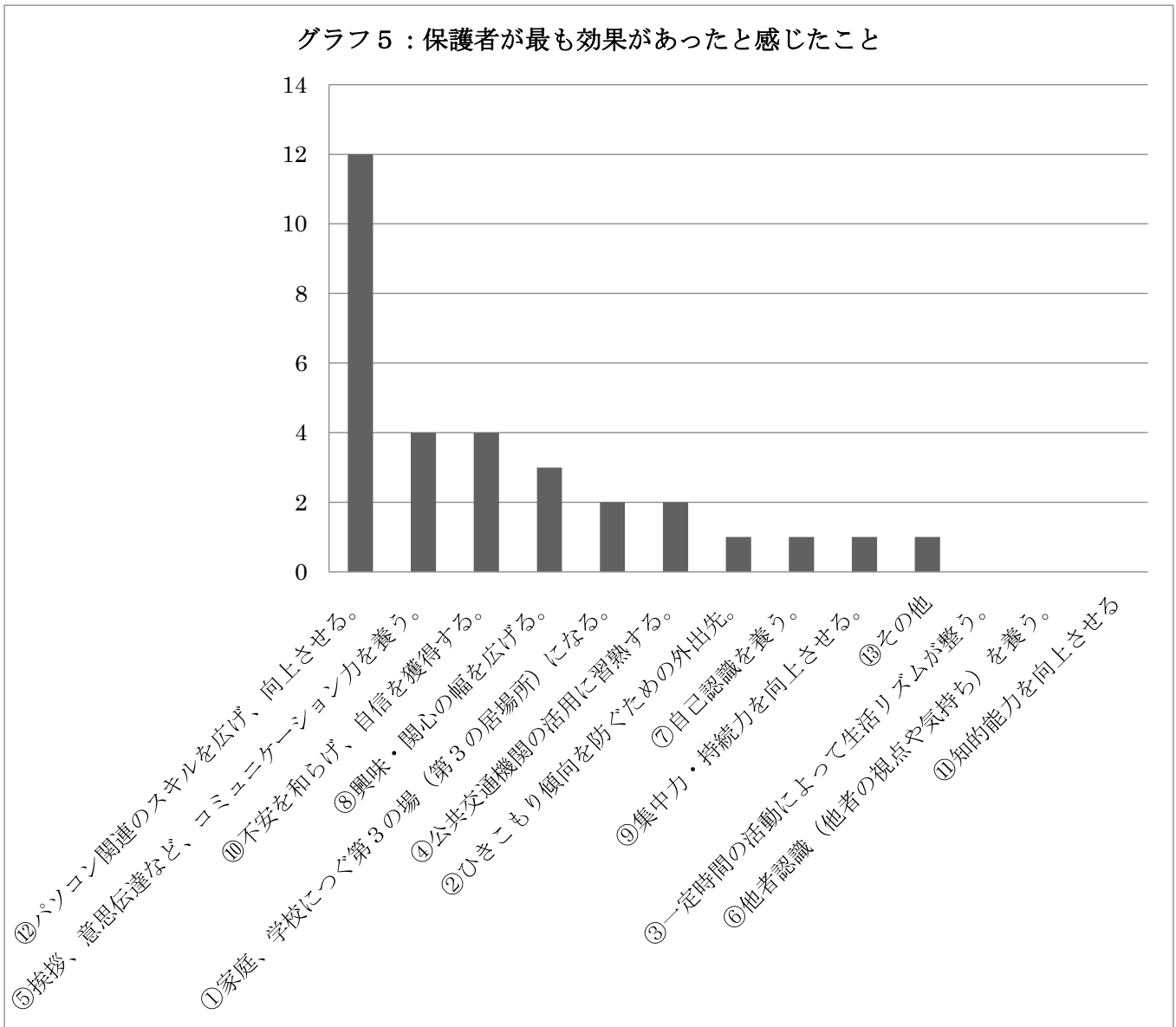
「⑫パソコン関連のスキルを広げ、向上させる。」が1位となったが、これは、保護者が最も期待する機能と同一の結果であり、保護者が期待していたことと効果が一致していることがわかる。また、2位に「⑤挨拶、意思伝達など、コミュニケーション力を養う。」と「⑧興味・関心の幅を広げる。」が同数で並んだ。4位に「①家庭、学校につぐ第3の場(第3の居場所)になる。」、5位に「④公共交通機関の活用に習熟する。」、10名以上が選択したものとして、6位に「③集中力・持続力を向上させる。」、7位に「⑩不安を和らげ、自信を獲得する。」が続く。概ね保護者が期待していた機能と重なる。札幌チャレンジ放課後等デイサービスの実践は、保護者のねがいと期待に答えていたといえよう。ちなみに「自信の獲得」は、札幌チャレンジの目標概念として最重要の課題である。

グラフ4：保護者が効果として感じていること



7. 保護者が札幌チャレンジド放課後等デイサービスを利用して最も効果として感じたこと

設問4は、札幌チャレンジド放課後等デイサービスを利用して最も効果として感じていることであった。結果は、グラフ5のとおりである。



最も効果があったものとして、1位に「⑫パソコン関連のスキルを広げ、向上させる。」ことであった。2位に「⑤挨拶、意思伝達など、コミュニケーション力を養う。」と「⑩不安を和らげ、自信を獲得する。」が同数で並んだ。ここから、パソコンスキルの向上、コミュニケーション力の向上、自信の獲得がリンクしていることがわかる。加えて、札幌チャレンジド放課後等デイサービスの目標が概ね実現していることがわかる。また、4位に「⑧興味・関心の幅を広げる。」が入っていることからヨコへの発達の効果もあったようだ。5位に「①家庭、学校につぐ第3の場（第3の居場所）になる。」と「④公共交通機関の活用に習熟する。」が同数で並んだ。札幌チャレンジド放課後等デイサービスは、家庭、学校から離れた第3の場、すなわち、放課後生活の豊かさを担保する場であるが、「公共交通機関の活用に習熟する」とは、第3の場を活用することに伴う副次的な効果である。効果論において、主要な効果と副次的な効果を

腑分けして認識していくことも必要であろう。以上の結果から、札幌チャレンジド放課後等デイサービスの実践は利用者のニーズに概ね応えていたといえる。

8. 札幌チャレンジド放課後等デイサービスを利用して期待通りではない、うまくいかないなどと感じていること

前述のとおり札幌チャレンジド放課後等デイサービスの実践は利用者のニーズに概ね応えているが、以下に紹介する保護者の記述のとおり、保護者から見て期待どおりに進んでいない例もある。要望も含めて列記しておく。(自由記述の一部について趣旨を変えずに加除修正)

- ①考えていた以上にパソコンに興味を示さず、パソコンのスキルが伸びない。札幌チャレンジドに行くことは好きである。
- ②アスペルガーの特性が足を引っ張り、上手くいかない。コミュニケーションが苦手、人がいる場所が苦手、人が触ったものがさわれない、人の「におい」が気になって集中できない等々。親にはわからない本人の生きづらさがある。頑張るほどに苦しい状況。
- ③スモールステップでパソコンスキルを身につけているが、短い時間や週に一度ということもあり、学べる時間が限られていることがやや課題と感じている。
- ④パソコンに興味があり、自ら通いたいといった場所だったが、人とのコミュニケーションに不安があり、パソコンの楽しさよりも、不安の方が大きくなり、通えなくなった。
- ⑤公共交通機関を活用したいが、乗り継ぎなどができないので、もっと近くにあればと思う。
- ⑥保護者としては、作曲ソフトなどが使えるようになると、音楽の趣味が深まるのではと期待していたが、本人がそれを特に希望していないのと、その分野に明るい指導者でいないようなので、ふれさせるきっかけがなく、残念に思っている。
- ⑦興味のあった PC、プログラミング等、デイサービスでは楽しんでやっているようだが、自宅で継続的に練習をしないことから、習得までには至らない。
- ⑧子供と指導者との意思疎通がとれているか、子供の態度はどうなのか、わからない部分がある。
- ⑨指導されているカリキュラムのことについて、よくわからない部分があるが、親のほうで電話で聞くまでもないように思って電話していない。できれば数か月に一回でも、直接話を聞けたらと思っている。

支援的な取り組みを真骨頂とする札幌チャレンジド放課後等デイサービスであるが、ここにおいても不適応状態を呈する<一定の層>が存在していることに留意すべきである。支援者側の視座からは、おそらく「自滅しているように見える」層である。この層に属する当事者への支援のあり方、環境設定のあり方の究明は焦眉の課題である。

9. 札幌チャレンジド放課後等デイサービスを利用することでプラスの変化として感じていること

保護者は我が子のプラスの変化について、エピソードを交えて以下のように記述している。(自由記述の一部について趣旨を変えずに加除修正)

- ①高校で情報処理の勉強をしているが、この分野は教えられない。チャレンジドの先生には、「ここがわからない」など、相談したり、アドバイスをしてもらったり、教えてもらったりと、結果として、資格

合格すると本人の自信にもなっている。

- ②本人の興味のあることをきっかけに色々と学ばせていただいている。家でも学校でもなく、第三の場所として、いつもは注意されるようなことも、安心して吐露できている。本当に感謝している。
- ③最初は続かないのではないかと、思っていたが、継続して通えている。コミュニケーションやパソコンスキルは少しずつ進歩しているように思えるが、波はある。(気持ちの上がり下がり)
- ④まだ通い始めたばかりのため、効果は感じていないが、時間内に文字の入力する文字数が少しずつ増えていき、良い方向に向かっているなど思う。
- ⑤学校以外の居場所でたくさんの方々とのコミュニケーションは、とても良い刺激になっている。
- ⑥小さなことでも、出来るようになると自信になり、生活が楽しくなっている。
- ⑦ローマ字打ちが全然できなかったのが、札幌チャレンジドに通ってから、出来るようになった。
- ⑧自閉症傾向が強いので、他者を頼りにすることが少なかったが、講師の方と信頼関係が築かれてきたのが、パソコンなどで困ったことがあった時、講師の方に聞いて自分で解決しようとするようになった。
- ⑨楽しみな活動と感じているようで、体調が悪くて学校を早退してきても、札幌チャレンジドは行きたがる。そのような場所が学校にあるならもっと良いと思う。札幌チャレンジドのもつ意味は大きいと考えている。
- ⑩パソコンに興味を持ち、タブレットを本人なりに使いこなすようになってきた。
- ⑪自分ひとりで慣れていない人や場所に行くことが出来ていたのでよかった。(これまでは母親が同伴していた)
- ⑫一度だけ、隣に座った男の子と、パソコンの使い方談義をして、便利な使い方をおしえてもらったと喜んでいて。
- ⑬何かに自信を持つことが難しかったが、得意分野ができることより、デイ内でのコミュニケーションだけではなく、学校や周りの人々とのコミュニケーションが広がった。
- ⑭特に変化は感じられないが、毎回それなりに楽しんで通えている。
- ⑮パソコンを打つ速度がすごく速くなった。家で、ワードで文章を作ってもらったら驚くほどいろいろなことができていた。
- ⑯学校が休みの日、親がデイサービスの日を忘れていても、本人自らデイサービスに行けたこと。
- ⑰通うことは楽しみにしている。高1は週1だったが、高2からは週2にしている。先生は毎月の報告書で良いところを伝えてくれるので、本人の自信にもなっている。
- ⑱JR 好きの息子である。こだわりが強く、同世代の子たちとの会話は早くてなかなかついていけない。自己肯定感も低いですが、札幌チャレンジドで制作した JR 表を学校へ持って行き、廊下に展示してもらったことで、周囲の人たちから褒められ、喜んで帰宅した。
- ⑲本当に楽しみに通っています。完成させたものを喜んで見せてくれる。
- ⑳月曜日が楽しみになっている。(デイへ行く日)
- ㉑チャレンジドを利用したい気持ちから、単独でも JR を利用できるようになってきている。
- ㉒家でもパソコンを開き、お友達への誕生日レターを一人で作っていた。
- ㉓将来の就労に役立つよう、エクセルを学びたいと言い、現在も取り組んでいる。
- ㉔パソコンでゲームを作り、遊ぶことが出来るようになった。簡単なゲームを作ったことで、自信につな

がり、学校の授業が楽しくなった。友達が色々作り方について聞いてくれることで、「自分はいらぬ人間」ではないと思うようになった。

㊸札幌チャレンジドを利用したい気持ちから、単独でも JR を利用することが出来るようになってきている。PC で試したいことをスタッフに相談し、アドバイスをもらい家庭で報告・許可をもらうなどすることが出来るようになった。

㊹札幌チャレンジドでやっていることを、わからない友達に教えてあげている姿が見られる。

以上、全体に通底しているのは、主体性の育ちである。他者から頼りにされるというエピソードに着目していることも、それが主体性涵養のトリガーになっているからだといえよう。

10. おわりに

特別支援学校の一部の現場において、目標や評価の記述において、たとえば「楽しむ」、「味わう」、「感じる」、「自信をもつ」という言葉を排除する傾向が強まっている。これは、「客観的に」「測定可能なように」「誰が見てもわかるような指標で」成果が求められるようになったからだ。すなわち、〇メートル歩いた、〇メートル飛ばした、〇秒注視できた、〇分待つことができた、というような数値至上主義的評価、換言すれば操作主義的傾向の強まりによるものだが、翻って、子どもの内面の変化など、見えない部分の発達に関心が払われなくなるという問題が惹起することになる。詳細については二通論の拙稿『特別支援教育の<チーム学校>としての展開と「個別の教育支援計画」・「個別の指導計画」の課題』をされたい。2)

このような本末転倒という疑念を抱かざるを得ない教育が散見される一方、札幌チャレンジド放課後等デイサービスでは、パソコン指導を入口にして、ストレートに不安感の緩和や自信をもつことを目標とする教育に取り組み、本調査で明らかのように特筆すべき成果をあげている。

今後も特別支援教育の一環としての放課後等デイサービスの実践を注視、その創造、発展に貢献していきたい。

文字どおりの末尾の言葉となるが、本調査に快く協力してくれた札幌チャレンジド放課後等デイサービスの保護者の皆さんに感謝する。

【註】

- 1) 札幌チャレンジドは、2000年5月、障がい者を対象としたパソコンボランティア団体として設立。2001年4月、NPO法人化し、障がい者の就労支援、就職支援に取り組む。2017年4月、中高生を対象とした放課後等デイサービスを開始し、北海道内初の障がい者のためのキャリアデザインセンターとして活動の幅を拡げている。
- 2) 二通論『特別支援教育の<チーム学校>としての展開と「個別の教育支援計画」・「個別の指導計画」の課題』札幌学院大学教職課程委員会『SGU 教師教育研究第32号』所収 2018年2月 pp.42-51